様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　23　年　5　月　15　日現在

機関番号：30105
研究種目：基盤研究Ｃ
研究期間：平成 19 年度 ～ 平成 22 年度
課題番号：19530630
研究課題名（和文）自分描画法に関する臨床基礎研究～思春期・青年期への取り組み
研究課題名（英文）A fundamental clinical study of the self-portrait method: toward puberty and adolescence.
研究代表者
小山　充道（KOYAMA MITSUTO）
藤女子大学・人間生活学部・教授
研究者番号 20170409

研究成果の概要（和文）：

筆者は自分描画法（Self-Portrait Method；以下 SPM と略す）研究において、子どもから大人へと成長するに従って落書きに変化が生じる点に着目した。本研究において落書きは人の思いを映し出していると仮定し、SPM を落書き行為とみなした。また筆者は思いの深まりの経過を説明する方法として、「思いの理論（“OMOI” approach to psychotherapy）；小山（2002)」を用いた。本研究結果、落書きには「今の自分のありよう」「今、自分が気になっていること」「心理的背景」「心の中に隠れているもの」の 4 つの要素が含まれ、これらが関わり合って人の思いが構成されることがわかった。2007 年度は大学生 40 名に対して SPM を実施した。その結果、SPM は性差の影響をほとんど受けないこと、そして SPM を用いると個人の思いを浮かび上がらせることが可能であることを確認した。2008 年度は北海道立高校２校の協力を得て、総計 219 名に SPM を実施した。その結果、SPM を実施することで緊張緩和の効果が認められた。また「思い」という言葉から想起する色彩は男女とも「透明」と答える人が最も多く、そのあと赤、白、橙と続き、最後に紫と黒をあげる人が多かった。2009 年度は中学生 183 名を対象に SPM を実施した。その結果、SPM を実施することで緊張が緩和されることがわかった。思春期にある人には SPM は有効に働くことがわかった。「思い」という言葉に最も近い色を尋ねたところ、透明(22%)→白(18%)→赤(17%)→燈(14%)で 71%を占めた。いずれも思春期の人が好む色だった。2010 年度には、B 高校からの依頼で、高校 1 年生と 2 年生合わせて総計 320 名に対して SPM を実施した。本研究目的は、SPM がスクリーニングテストとして活用できるかどうかを見定めることにあった。その結果、SPM はいくつかの留意点を踏まえた上で実施すると、スクリーニングテストとしての効果が見込まれることがわかった。以上、4 年間にわたる SPM 研究の結果、SPM は心理療法として活用できる可能性が充分にあることがわかった。

研究成果の概要（英文）：

Using a self-portrait method (SPM) study, I focused on the points at which changes in graffiti occur between childhood and adulthood. In this study, I supposed graffiti to project the thoughts of the person, and considered SPM itself to be an act of graffiti. In addition, I used the "OMOI" approach to psychology (Koyama, 2002) as a method to explain the deepening thought progression. The results of the study show that 4 elements, one's present state, one's current interests, one's psychological background and one's hidden

thoughts, are involved in graffiti and that one's thoughts are constructed from these elements.

I performed an SPM study on 40 university students in 2007. The results confirmed that SPM was little affected by gender differences, and that it could be used to capture personal thoughts. In 2008 academic year, in co-operation with 2 Hokkaido prefectural high schools, I performed SPM on a total of 219 students. Found that SPM had a relaxing effect on the participants. When asked to associate a color with the word "thought", a majority of respondents, male and female, chose "transparent", followed by red, white and then orange. Many respondents also chose purple or black. I next performed SPM on 183 junior high school students in 2009. Again, the SPM process appeared to relieve stress in the respondents, which showed that SPM was effective in adolescents. We found the color nearest in association to the word "thought" in 71% of respondents was transparent (22%), white (18%), red (17%) and orange (14%). In all cases it was the color most liked by the respondent. In the 2010 academic year I performed SPM on a total of 320 1st and 2nd year students from B High school. The purpose of the study was to investigate whether SPM cold be used as a screening test. The results showed that SPM could be effective if certain points were kept in mind during its performance. The above results obtained over the past 4 years indicate that SPM can be applied as a psychotherapeutic tool.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	400,000	120,000	520,000
2010 年度	400,000	120,000	520,000
年度			
総　計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学
キーワード：SPM、対話療法、思いの理論

１．研究開始当初の背景

心理療法と関わる描画法はグッドイナフテスト(1926)やマッコーバーテスト(1949)、HTP テスト(Buck;1948)、バウムテスト(Koch;1952)、ワルテッグ描画テスト(1953)、動的家族描画法(Burns&Kaufman;1972)が知られ、日本で開発されたものには MSSM 法(山中;1984)、九分割統合絵画療法(森谷；1986)などがあげられる。多くの描画法は心理査定の道具として開発された。河合創案の箱庭療法(1966)は心理査定と心理療法の双方を包含するが、箱庭道具がなければ心理療法はできない。めざすは簡便でかつ心理査定と心理療法の両方の機能をもつ描画法の開発にある。筆者は病院および教育現場での心理臨床経験を 32 年もつが、この間対象者が A4 版の白い用紙にクレヨンや色鉛筆で絵をおもむろに描いている姿に何度も出会い、筆者は描

画に投影されているのは人の“思い”ではないかとの感触をもつようになった。筆者創案のSPMでは、『自己像（自分を描く）』、『自分と関連ある人や物のありかた（気になる人、物や出来事を描く）』、『自分が置かれている心理的環境（背景を描く）』、そして『どこかに隠れているものの存在』を順次描いていく。

SPMは、第1回日本腎不全看護学会学術集会において小山（1998）「カウンセリングにおける気づき～SPMを用いて」で世に紹介された。その後の萌芽研究では小学生から高齢者の自分描画を採取し結果を分析した。本研究では集団で自分描画を採取したが、SPMを心理療法に取りこむには実施中に対象者の心に何が生じるか、個別に臨場感がある中で資料を得る必要がある。

２．研究の目的

現在頻発する思春期・青年期の心に関わる事件に接し、子ども自身が心理的環境に関してイメージの揺らぎを感じていると思う人は数多い。SPMは、心を外界に投影するひとつの心理査定法であり、また治療的対話を行いながら描画するため、本描画法そのものが心理療法という側面をもつ。

本研究はSPM体系化の第2段階として位置づく。対象者の描画を基礎資料として、各発達段階で自分および周囲が描画者によってどのようなイメージでとらえられているのかを明らかにすることで一般群の描画特徴を検出し、心理療法および心理査定の道具としての有効性を見極めていく。目的は３つ。

1）　思春期・青年期にある人の“今の思い”を本法でつかみとることができるか？

2）実施対象者が関与しながら観察することの臨床的意義と可能性について検討を行う。

3）　本法の学術的な価値の検討を行う。SPM実施時の心理的動きをつかむ目的で、リアルタイムな映像や音声、実施後に実施する質問（Post Drawing Inquiry：PDI）等の質的データを基に、細やかな心理変容過程を追う。さらに質的分析を補完するものとして、統計を用いた量的分析を行う。

３．研究の方法

4年間にそれぞれ研究手法が異なるSPMに関する８つの研究を実施した。研究初年度は大学生を対象に研究を実施した。

SPMの実施後、PDIを行ない、口頭で回答を得た。心理テスト〔K-SCT〕を実施。対象者の不安感を取り除くために、質疑応答に関して可能な限りの言語フィードバックを行ない終了。この間、実施所要時間は約１時間であった。質的分析を実施。本法実施時〔前・中・後〕に対象者の心にどのような思いが生じているのかを把握するために、ビデオ録画、音声録画を用い、エピソード記述をもとにした対話分析を行なった。

2年目は北海道立高校２校の協力を得て、総計219名にSPMを実施した。Ａ高校の4名については事例研究と位置づけ、筆者が全員と面接した。対象者の了承を得て描画をビデオ撮影した。実施にあたっては、研究補助員の協力を得た。3年目はN市立Ａ中学校の協力を得て、男女40名を対象にSPMを実施した。手順は2年目と同じであった。

最終年は2年目に実施したＡ高校から、SPMをスクリーニングテストとして利用できないかとの申し出があり、試行研究として全校生徒に対してSPMを実施。高校におけるSPMの活用に関する検討を行った。具体的にはSPM研究で使用する各応答項目の妥当性の検討と、各項目がどのように心理的な状況を映し出すかについて詳細な個別検討を行い、さらに分析結果から、気になる生徒の検討等を行った。手探りのアナログ研究であった。

このほか、SPMと他の描画法（スクィグル、

コラージュ療法、風景構成法等）の比較を行い、SPM の特徴を明らかにした研究や、SPM と TAT を同時に体験したのちに、各個人が両者の有用性についてどのように感じたかについて調べた研究等がある。

４．研究成果

研究成果の一部として、「日本学術振興会「科学研究費補助金」基盤研究(C)　研究成果報告書」、総 52 頁の冊子を 2011 年 2 月 25 日に発行した。本書に記載ある資料をもとに、研究成果の内容について次に記す。

（１）　中学生の資料分析結果

以下分析結果からわかったことを記す。

①少し自分を振り返ると(気になるものを見定める作業)、男子は具体的なものへ関心が向き(例：スポーツ、趣味)、女子は抽象的なものへ関心が向きがち（例：学校で起こることや、心理的な思いへののめり込み）。小学生よりも金銭に対する執着が薄くなる。男女とも人間に対する関心には差がない。

②もっと深く振り返ろうとすると(隠れているものを同定する作業)、男女とも生き物が思い湧き出てくる。ただし男子はペットとは思われにくい「虫、ネズミ、蛇」で 48%を占め、ペットとしての「犬」が 19%でこれに続く。一方、女子の多くはペットを思い描く。「犬、猫、ウサギ、小鳥」で 36 個の応答、生き物全体の応答 49 の 73%を占める。男女とも、次に多いのは心理的なものだった。男子の場合は「影、見えない力、落とし穴、欲望、悪」等、女子では「影、ハート、悪い心、自分、霊、お化け」などがあった。男女とも見えないところでうごめく力に対する恐れや関心がわいていることがわかる。

③背景では、男子は政治的な動きや内省意識が働き、女子は「ハート（あこがれ）」の関心が高い。

④本法実施後の感想では、男子の 96%、女子の 98%が SPM を肯定的に受けとめた。男女合わせて 6%ほどの生徒には SPM を受けることに抵抗があった。

（２）　高校生と大学生の質的比較

①　SPM の受けとめ度合いの分析

男子の場合は、受けとめ度合いが 47%（高校）→34%（大学）と、SPM に対する受けとめ度合いが低下。一方、女子の場合は 54%（高校）→40%（大学）と、SPM に対する受容度が低下した。男女とも男子のほうが多く警戒心、抵抗などを示した。受検時の戸惑いについては、女子よりも男子のほうがより強く SPM を受けることに戸惑いを示す傾向にある。高校から大学生の頃、男子の場合、肯定的受容度も受容に伴う戸惑い度もともに 3 割程度で、変化が認められない。一方、女子の場合は、受けとめの度合いは 54（高校）→40（大学）と下がるが、戸惑いの度合いは 28（高校）→29（大学）と変化がない。つまり女子の場合、男子と同様、戸惑いを示す人は 3 割ほどいるが、大学生になって SPM の意味を感じ取れるようになり、「戸惑うが SPM を受けても良い」という気持ちになるのだろう。

②「気になるもの」に関する考察

高校生男子では「スポーツ」「勉強」「社会的出来事」等と、興味関心の幅が自分から離れて、社会にまで拡がる。一方、女子では「勉強」「音楽」「恋」「スポーツ」「友達」「ペット」で約 5 割を占め、思いの対象が自分の周辺にあって、まだ社会にまで意識が広がっていない様子がうかがわれる。女子で「恋」は約 9%を占めるが、男子では上位 10 位以内に含まれない。大学生男子では「学業」「スポーツ」「恋」「自然」「心理」「人物」で約 6 割を占める。4 人にひとりは「学業」を意識しているが、この傾向は女子も同様である（24%）。男女とも大学の時期になると「恋」が本格化し、ともに 7～8%を占めるようにな

る。また「心理」も男女とも６％を占め、心理的に自分自身を振り返る機会が徐々に増加する。男女とも上位６位までのうち、４つ（「学業」「恋」「心理」「人物」）は同じものが並んでいる。まさに人との交流なくしては、大学時代は過ごせないのかもしれない。

③「隠れているもの」の考察

高校生男女とも「心理」「生き物」「ペット」が上位 3～４位を占めた。「心理」「生き物」「植物」「自然」などが、高校生が意識する「隠れたもの」の上位を占める。
大学生では男女とも「心理」「生き物」「ペット」が上位３位を占めた。男子ではこのあと「スポーツ」「音楽」が続くが、女子では「人物」「自分」が続く。思春期・青年期のいずれでも「心理」が上位を占めることがわかり、SPM は「心＝思い」にふれる可能性があるということが確認できた。

（３） SPM と TAT 間の有用性の比較

TATとSMPの共通点の概要は次のとおり。

①どちらも「絵画刺激」を扱い、「絵画刺激」を通してアセスメントする。被検査者の感情や思考、イメージなどをそれぞれ絵図版や描画といった非言語的な媒介に投映する。被検者は自分のイメージ，想像力を活性化させる。

②自己についての物語を語る。

③クライエント（以下 Cl と略す）が直面化しにくい心理的問題にふれることができる。Cl はときに心理的問題について語ることに抵抗を示し、無意識的に否認することがある。TAT や SPM といった投映法、描画法を用いることで、Cl 自身が抱有する心理的問題を間接的に扱うことができる。

④日常生活では見られない被検者の思いや行動特徴を窺い知ることができる。

⑤解釈が検査者の技量に左右されやすい。

TATとSPMの特徴の比較は次のとおり。

①研究目的について

[TAT]：被検査者の無意識領域を暴露するような空想を起こし、根底にある自己抑制的な傾向を露にする。

[SPM]：被検査者の“今の思い”を把握する。Cl 自身が自分理解を深める道具として、かつセラピストの Cl 理解を深める道具として用いられる。

②思いの現れ方

[TAT]：被検者の悩みや不安、欲求といった被検者の現在の「思い」は隠され、「思い」はダイレクトには現れにくい。

[SPM]：「今の」Cl の「思い」にふれることができる。

③面接場面における有用性

[TAT]：実施は、心理療法や短期の精神分析に入る契機となる。

[SPM]：言語だけを用いた面接を行っていて行き詰ったときに流れを変える助けとなる。また幼児にとって描画活動は日常的に慣れ親しんだものであるため、プレイセラピー場面にも導入可能で、負担をかけずにアセスメントをする機会を設けることができる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

① 小山充道、落書きの心理臨床的考察、藤女子大学紀要、査読無、第 48 号（第Ⅱ部）、2011、p159-176.
② 小山充道、心理臨床最前線～心理アセスメントの現在、依頼原稿、日本心理臨床学会誌『心理臨床の広場』 第 3 巻第 1 号(通巻 5 号)、2010、p42-43.
③ 小山充道、“思い”の特質～心理療法の視点から、査読無、札幌学院大学心理臨床センター紀要、第 10 号、2010、p41-51.
④ 小山充道、多彩な身体症状と就労困難を訴えた男性に対する SPM の適用、査読有、名寄市立病院医誌、第 17 巻 1 号、2009、p42-48.
⑤ 小山充道、SPMを用いた高齢者に関する臨床心理学研究－高齢者と大学生の思いの特徴、査読有、高齢者問題研究、第 24 巻、2008、p17-33.
⑥ 小山充道、描画を臨床に生かすには～心理療法における描画の活用、依頼原稿、臨床心理学、第 7 巻第 2 号、2007、p165-173.

〔学会発表〕（計 10 件）

① 小山充道「SPM(SPM)と TAT における有用性に関する比較研究」日本心理学会第 74 回大会発表論文集、p322. 2010 年 9 月、大阪大学

② 小山充道「高校における SPM の活用に関する検討」日本心理臨床学会第 29 回大会発表論文集、p294. 2010 年 9 月、東北大学

③ 小山充道「SPM における高校生の諸特徴」日本心理臨床学会第 28 回大会発表論文集、p222. 2009 年 9 月、明治学院大学

④ 小山充道「SPM（SPM）の有用性に関する比較研究―実用性を絡めて」日本心理学会第 73 回大会発表論文集、p435. 2009 年 8 月、立命館大学

⑤ 小山充道「SPM における臨床基礎研究―青年期における特徴」日本心理学会第 72 回大会発表論文集、p412. 2008 年 9 月、北海道大学

⑥ 小山充道「SPM を用いた高齢者に関する臨床心理学研究」日本心理臨床学会第 27 回大会発表論文集、p190. 2008 年 9 月、筑波大学

⑦ 小山充道「高齢者の SPM～成人資料との比較」日本心理臨床学会第 26 回大会発表論文集、p211. 2007 年 9 月、東京国際フォーラム

⑧ 小山充道「青年期の SPM」日本心理学会第 71 回大会発表論文集、p314. 2007 年 9 月、東洋大学

⑨ 小山充道「幼児期、脳外科手術を受けた女子中学生の苦悩と心の成長～自分描画法を用いて“思い”をつかむまで」日本心理臨床学会第 25 回大会発表論文集、p23. 2006 年 9 月、関西大学

⑩ 小山充道「心理療法における心理アセスメントの活用」日本心理臨床学会第 25 回大会発表論文集、p19.（研修講師）、2006 年 9 月、関西大学

〔図書〕（計 3 件）

① 日本心理臨床学会編、丸善、「心理臨床学事典『発達障害のアセスメント』『認知症のアセスメント』の項を分担執筆、2011（印刷中）

② 小山充道編著、金剛出版、必携臨床心理アセスメント、2008、総 516 頁（＊SPM の概要を記す）

③ 村山正治編、金剛出版、学校臨床のヒントーSC のための 73 のキーワード「学校臨床と心理テスト」「知能検査」「性格テスト」の項を分担執筆、2007 、p144-146、169-175.

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

小山 充道（KOYAMA MITSUTO）

研究者番号：20170409

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：